

令和元年度第1回南あわじ市総合教育会議（議事要旨）

1. 日 時 令和元年7月24日（水）
午前10時00分開会
午後 0時10分閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

「学ぶ楽しさ日本一」

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

〈南あわじ市〉

南あわじ市長 守本 憲弘

教育長職務代理者 轟 孝博

教育委員 岡 一秀

教育長 浅井 伸行

教育委員 数田 久美子

教育委員 宮崎 典弘

〈学校組合〉

管理者 守本 憲弘（兼務）

教育長職務代理者 狩野 時夫

教育委員 宮崎 典弘（兼務）

教育長 浅井 伸行（兼務）

教育委員 数田 久美子（兼務）

教育委員 本條 滋人

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 青島 一路

市民福祉部副部長 西庄 登

教育次長 仲山 和史

学校教育課長 山川 直樹

体育青少年課長 原口 言美

教育総務課係長 板野 あゆ美

ふるさと創生課長 栄井 賢次

子育てゆめるん課長 西岡 義文

教育総務課長 中村 尚之

社会教育課長 福田 龍八

教育総務課副課長 廣瀬 ちさ

1 開 会

2 市長あいさつ

3 議 事

「学ぶ楽しさ日本一」について

(1) 現在の子どもたちに何が必要なのか、子どもたちの課題について

《事務局説明》

【市長】 まず、子どもたちに何が必要なのか、教育委員の皆さまの、ご意見を伺いたい。

【委員】 「学校に行くのが楽しい」と思える子どもが増える環境づくりが必要である。

【委員】 「居心地の良いまち」であってほしい。そのためには、社会的弱者をどのように支援していくのか、というところから始まるのではないか。

学校が楽しくない理由として、いじめ・不登校が絡んでいることがある。いじめ・不登校問題については、最初の対応が肝心であるので、学校不信・教師不信にならないよう学校側の対応が重要である。

今の子どもたちは、言語能力・表現力を高める必要がある。

教育センター等による、情報共有のシステムづくりが必要である。

【委員】 「学ぶ楽しさ日本一」を目指すには、小中学校時の指導者の指導力が、高校・大学へと繋がると思うので、教員の資質能力向上が必要不可欠である。

【委員】 すべての子どもたち、理解の遅い子も障害を持った子も全員が、安心して学べ、学校は楽しい場所と思えるようにしてあげることが大事である。

学校教師がいくら頑張っても、家庭問題などいろいろな問題によって不登校・引きこもりなどが発生してしまう、そういう時には学校でチームをつくり、家庭への協力などが必要である。

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が必要である。

【委員】 子どもたちを認め褒めてあげることにより、やる気を起こさせることが大事である。やる気が高まると、自信にもつながり楽しさが見えてくる。

【教育長】 子どもたちの自己肯定感を高めるには、褒めることがベースになってくる。子どもたちの良いところは具体的なことばで褒めてあげることが大事である。

いろんな取り組みをしながら自己肯定感を高めることが大きなキーポイントとなる。

自分のやっていることは社会にとって意義のあることである、ということを意識させながら、自分の生き方・あり方を考え、その中で課題を乗り越えていくことが、目標を達成する・夢を達成することにつながっていく。その一つの例として防災教育がある。防災ジュニアリーダー研修、東北ボランティア活動等を通して、「人として自分はどのように生きたらいいのか」ということを見つめなおす機会となる。そのような切り口から、自分の生き方・あり方、夢・目標につなげていきたい。

(2) 学ぶ楽しさとは何か

《事務局説明》

【市長】 楽しく学ぶということを実現し、子どもたちにどのような力を付けさせるのか、どのような人物に育てるのか、教育委員の皆さまの、ご意見を伺いたい。

【委員】 情報番組で、東京の公立中学校が、宿題なし、テストなし、担任なし、授業は全てタブレット、服装・髪型自由、文化祭・体育祭では競争を廃止、というのが放送されていた。これが学ぶ楽しさ日本一に繋がるのかというところもあるが、子どもたちは意気揚々の学校生活を送っていた。ただ、今回一番求めている「対話的」という場面は見られなかった。私たちは「主体的・対話的な深い学び」ではなく、「主体的・対話的で深い学び」の「で」の助詞の意味も受け止めていかなないといけないと思う。「主体的・対話的で」を手段として深い学びを、今回の文科省の新学習指導要領は意図しているのだと思う。

帰結するところは、教員の資質が全てにかかっている。教員の世代交代が進んでいるなか、ベテラン教師が持っているノウハウを伝搬しないといけない。

【委員】 子ども同士が認め合うということが大事である。子ども同士が認め合える学校・社会ができれば、いじめ問題もなくなっていくのでは。地域全体として子どもを認め褒めてあげることで、自然と子どもたちも認め合い褒めることができるようになり、友人関係も上手くいき楽しくなると思う。

【委員】 「自分をみつめる力」「人とかかわる力」「課題解決にむけてやりとげる力」「未

来をつくる力」をつけることにより、南あわじ市を大切におもう人づくりに繋がる。ただ、南あわじ市が好きで大切におもっていても、就職先がなければ出ていってしまうので、そういうところも考えなければならない。

【委員】 小学生・中学生には、読解力をつけることと、如何に作業をさせ理解させるかということが大事である。読解力がなければ問題を読んでも理解できないため、何もできない。子どもたちに読解力をつける、作業をさせることによって、それができた時の楽しさが、「学ぶ楽しさ日本一」に繋がっていくと思う。

【委員】 特性のある子どもについて、保育所・幼稚園の幼児期の早い段階での発見が大事であるが、特性を理解した指導者とか専門家を配置しているのか気になる。その特性が小学生になった時に、いじめの原因につながることもあり、そのいじめが引きこもりにつながることもあるため、専門家の配置を考えていただき、いじめ問題も徹底的に取り組んでいただきたい。上手く人間関係を構築できない人は、人間不信、対人恐怖症などを乗り越えられずに、引きこもりになってしまうことが多い。将来、社会に出て仕事をしたり、いろんな国の人と交わる中で、どういう姿勢で対応するかということが大事で、自分の言いたいことを言えるような人間になってほしい。そして、自分のふるさとに誇りを持てるような人間になってもらうために、学校生活の中で、どの子ども気持ちよく自分らしく生きれるように、懐の深い学校・社会になってほしい。

【委員】 子どもは、成功体験があった時に先生から褒められたり、友達から羨望されることで、嬉しく感じ、次の目標への意欲も出て楽しさが実感できる。子どもたちそれぞれの能力があり、出来る子と出来ない子ということもあるかもしれないが、あらゆる場面での成功体験を積めるように、そして楽しさを実感できるような取り組みにしていきたい。

【教育長】 子ども側から見るとどうなのか、先生側から見るとどうなのか、というところから整理していきたい。子どもたちと先生と共通することは、意欲を持って主体的に取り組んでもらうためにどうすればいいか、という観点からいろんな取り組みを考えていきたい。子ども側から見ると、いろんな体験をさせ、学ぶ楽しさを体験させることによって、見えない力を如何につけていくか、その後、見える学力を如何に向上させるか、というようなストーリーで繋げていきたいと思う。先生側から見ると、授業改善をその中へ、どのように落とし込んでいくかということが大きな課題である。

(3) 具現化に向けた取り組み例

《事務局説明》

- 【市長】 具現化に向けた取り組み例について、教育委員の皆さまの、ご感想を伺いたい。
- 【委員】 アフタースクールについて、内容が盛りだくさんで楽しそうである。内容的・役割的に違うかもしれないが、学童の内容がさみしいのではないか。今後、学童とアフタースクールはどのような形になっていくのか気になるところである。
- 【市長】 学童は制約が多く、いろんな課題があるため、子どもたちが放課後をもっと伸び伸びと過ごせるようにということで、八木で試験的にやっているが、これが上手くいけば全部アフタースクールに乗り換えていきたいと考えている。
- 【委員】 読書の推進は、どんどん進めていただきたい。読書経験の差によって表現力の差が出てくる。言葉の数を増やすことによって心の豊かさも出てくると思う。
アフタースクールもどんどん進めていただきたい。不登校の子どもたちが自由に行けるフリースクールのような場所も考えていただければと思う。
- 【委員】 アフタースクールの取り組みを、もっと広報し地域に浸透させていただきたい。地域には専門性や経験を持った方で、講師として協力していただける方がたくさんいてと思うので、もっと積極的に広めていただきたい。
- 【委員】 南あわじ市は郷土学習に熱心であるが、郷土学習はすればするほど時間が必要である。時間をかければ良いというものではなく、決められた時間の中で成果を上げるにはどうすればいいかという工夫が学校に必要である。
- 【委員】 アフタースクールはすばらしい事業だと思うので、各校区で積極的に取り組んでいただきたい。どこも少子化で、遊ぶ場所もない、遊ぶ友達もないという状況なので、このような事業で友だちづくりができれば良いと思う。
- 【委員】 コアカリキュラムの系統について、伝統芸能で小学校から中学校まで一貫してつくられていることはすばらしいと思うので、ぜひ続けていただきたい。
- 【教育長】 意欲的に、主体的にどのように取り組むのかということで、2本の大きな柱が考えられる。1本目は各学校の課題への取り組みということで、今やっている

スクールチャレンジ事業が中核となる事業になっていくと考えている。これを如何に拡大していくかということが大事で、先生方に如何に意欲的に参加してもらうかということ、今までは管理職が主体となり課題を考え授業を考えていたが、どんな課題があり何がしたいのかを中に入り意見を聞きながら進めていくということが必要である。課題解決するために、今までと違う新しい観点で事業を進めていただきたいと伝えている。それから皆さんも言われている、課題解決の大きな課題の1つとして授業改善を必ず入れてもらう、そういうような学校としての取り組みと、2本目の柱は、市全体としてどのような取り組みをしているかということ。市の取り組みの1つとして、コミュニケーション能力の向上とか読解力などがあり、それが1つの柱になると思っている。市全体として取り組むのは、学校教育だけではなく、子育てゆめるん課、公民館、図書館の取り組みなども含めて、同じ方向を向いてもらえるよう意見交換をしている。特に読解力の読み聞かせという部分は、就学前が大事なので、子育ての部分で子どもたちに本に親しんでもらい、読み聞かせ等を通じて読む楽しさを感じてもらいたいということが大事である。また、淡路三原高校と市長と協定を結んで、いろんな取り組みを進めているが、将来的に「学ぶ楽しさ日本一」の筋立てをして、就学前の子育て、幼稚園・こども園、小学校、中学校、高校まで同じ方向を向いた取り組みができればと考えている。

【市長】 「学ぶ楽しさ日本一」を進めていくうえで、教育委員会や行政から各学校どのようにするかということではなく、先ほどの大きな柱、読解力あるいは自己肯定感といった柱を提示しながら、それをどう解決していくのかということについては、先生方が主体的になってできるだけ現場で進めていく、という基本的な方針は提示されたと思っている。今日の議論を伺うかぎり、方向性については皆さん一致していただけると感じている。今後、どのような形で学校の取り組みを促していくのか、また、具体的にどのようなことを進めていくのかということについては、教育委員会で十分検討させていただき、次回の総合教育会議でご議論いただきたい。